

【会話ブログ】

2010年3月号



公認会話士

【会話ブログ】とある中国の校則より

「学校なんてただでさえ窮屈で息が詰まりそうなのに、ルールが多過ぎるのよ」

「どうして学校が窮屈だって思うんだ？」

「みんなで仲良しみたいな演技して、本性は隠して、家に帰ってあいつ死んじゃえば良いのに、とかブログに書き込んでるんでしょ」

「普通そんな事はブログには書かないんじゃないか？そんなクラスメイトのブログをたまたま目にしたら僕は悲しくて泣いちゃうかもしれない」

「あら、じゃあ私のブログを読んだら涙で何も読めないわね」

「そ、そんなに酷い内容なのか！？」

「バカね、ブログにブラクラを忍ばせてるのよ。そう簡単に私の筆舌に尽くしがたい文章を読ませるモンですか。大事なパソコンが壊れて誰もが涙目だわ」

「酷いどころじゃなくて鬼畜みたいだぞ。せいぜい警察に目を付けられないようにしろよ」

「前科者なんてハクがついてクラスで人気者じゃない。高校生なんて単純極まりない人種なんだから」

「前科と言っても内容も重要なんじゃないか？ハッカーならまだしも、ブラクラ程度の前科者じゃ笑い者になるだけだろう」

「そう、私を笑うなんて勇気のある人が果たしているのかしらね」

「笑ったらどうなるんだ」

「44cmに切り落として、定規にしてやるわ。中国には男女が44cm以内に近寄ってはいけない校則がある学校があるのよ。これからの時代に欠かせない便利な使われ方をするなんて、逆に私に感謝すべきね」

「ど、どこを切り落とすんだ！」

「場所なんてそんなに重要かしら。44cmの長さになる場所ならどこでも良いじゃない」

「僕は今から髪を伸ばすことにする！」

「あら、それはあなたが私を笑うつもりだ、と解釈して構わないのかしら」

「笑わない笑わない笑わない！絶対笑わない」

「あらそう。私のジョークを笑わないなんて良い度胸してるわね。44cmくらいに圧縮してやろうかしら」

「それじゃジョークじゃなくて定規だろ...」

2010.03.19 Fri

【会話ブログ】 赤なりか青なりか黄なりか

「痴っ漢が、つかんだ、みっぎてで、つかんだ」

「ずいぶん機嫌が良いじゃないか。ついに雨乞いが成功したのか？」

「雨降って地固まる。朝乗って痴漢捕まる。アメ部って地下に溜まるかも。そうなのかも？違うかも」

「地上で澆刺としているイメージでは上位の部活だと思うが。そんな事よりさっきから痴漢って何だよ」

「大混雑の最強線で背後にスーツ姿の男性が...」

「会話で漢字が違うとかホントは販促だからな」

「反則も違うんだよ！」

「いいから、続けて」

「山吹色のスーツ姿の、30代と思しき一見優男風の男性の、巖のような固くゴツゴツした右手の甲がうら若き乙女の柔肌の代表格であるでん部に、電車の微々たる振動をも味方につけるように押し付けられ...」

「細部にこだわった表現はどんなに秀逸でも逆に伝わらない事もあるから注意しろよ」

「痴漢見た」

「簡潔だったら伝わるって意味じゃないぞ！しかもお前が被害に遭ったわけじゃないのか！」

「グループだた」

「片言になるな！しかもさっきの描写は完全に単独犯だったぞ！」

「痴漢って10回言ってみて欲しいかも！そうなのかも。違うかも」

「痴漢痴漢痴漢...」

「SEXしよっ！って言ったのは？」

「かーんち！って、騙された！そもそも彼女の名前なんて覚えてない！」

「私の今日の下着の色は何ナリか？」

「赤ナリか？」

「赤名リカ」

「どうして僕が赤って言うのが分かるんだよ…」

2010.03.19 Fri

「何か面白いニュースがないなー」

「大人しい女子高生が理由なくクラスメイトの男子をナイフで一突き」

「それはスゴいな。いつ起こった事件だ？今朝の新聞に載ってたのか？」

「今から起こるのよ、新聞に載るのは明日以降ね」

「もしかして突かれるのは僕じゃないだろうな」

「彼女は成績も素行も普通で、目立たないタイプでした」

「お前は全然普通じゃないから安心してくれ」

「いじめはなかった、と我々は認識しております」

「いじめられてはいないな。僕の事をいじめてはいるけど」

「あら、私のような健康優良児がどうしていじめっ子なのよ」

「いじめに健康かどうかは関係ないだろう」

「すこやかで、やすらかで、やさしくて、いい児。完璧じゃない」

「月の下で見返る薄命そうな秋田出身の白皙女だよ、お前は」

「あら、全部美人とセットになる言葉じゃない。褒めるのが上手になったわね。あなたの家に私の爪や指を送ってあげてもいいわ」

「いつから江戸時代の遊女になったんだ！気持ちは嬉しいが現代ではそこまでする必要は無いぞ！」

「お互いの体を松の木に縛り付けて…」

「完全に心中じゃないか！僕はまだ死にたくない！」

2010.03.19 Fri

【会話ブログ】とある科学のプレゼント

「今日はどうしようかしら」

「別にネタが無いなら書かなきゃ良いんじゃないの？」

「でも会話が始まってしまったからもう止められないわ。ここで終了という手法もアリかもしれないけれど、それはもっと回数を重ねてからじゃないと許されないと思うわ」

「なるほど。新人が何を調子に乗って、って事だな。」

「少なくとも誕生日までは週に数回のペースは持続していきたいわね」

「へー、誕生日っていつなんだ？」

「3月19日よ」

「おい、昨日じゃないか。それじゃ丸一年続けるって事になるだろ！完全に目標設定を間違ってるぞ」

「ホントは5月15日よ」

「ウソをつく意味が分からない」

「良いのよ。誕生日なんて適当に発表しておけば。それにわざと間違えるのは誕生日の本当の日付けを強調するためでもあるのよ。もう誕生日まであと二月も無いのよ。今からアピールしなきゃ誰も祝ってくれないわ」

「なかなか姑息な手段だったな。ここまでして祝ってもらえなかったら相当寂しいぞ」

「その時は当日に誕生日みたいな顔して歩くわ」

「どうやってやるんだ、その顔は」

「誕生日と言えはロウソクでしょ。これを頭に刺すの。でも年齢分は大変だから、太いのが2本あれば充分ね」

「ロウソクがメインなのか？ケーキありきのロウソクって気がするけど...どうやって刺すんだよ」

「頭に布を巻いて、そこに刺すの。三角頭巾なんか安定してるし目立って良いんじゃないかしら」

「なるほど、夏以外にやれば目立つかもな」

「出来たら服装にも気を配るべきね。誕生日はやはり身を清めて出直す意味を込めて、白装束を着ると効果的よ」

「右前と左前を間違えたら大変な事になりそうだ」

「普通は右手が懐に入るように、右前と呼ばれる着方をするけど、この場合は目立つのが目的だし、左前で良いんじゃないかしら」

「霊媒師に成仏という名の誕生日プレゼントをもらわないようにしろよ」

「それを言うならパナウオーブでしょ、スカラー波というプレゼントをもらっちゃうかもしれないわ。その時はルカニー波をお返しにあげるの」

「ネタが古いな...誰も覚えてないんじゃないのか...」

2010.03.20 Sat

【会話ブログ】 バーガーの相方ホルダー

ドライブに便利！ありそうでなかった「ポテホルダー」登場

<http://news.walkerplus.com/2009/0916/16/>

「どんな品物かと思ったらフライドポテト用じゃないの」

「ポテトと言えばフライドポテトの事だろう」

「バカね、私達の世代には疑いようもなくポテチだわ」

「こういうのをジェネレーションギャップって言うのか？そもそもホルダーって名前だし、真っ先にフライドポテトを連想しないか？」

「車内でのポテチの置き場所問題について解決された。それ以外に価値のあるニュースなんて世界に一つも無いわ」

「お前は非実在青少年問題よりポテチの方が重要なのか」

「何よそれ。サキヤスティックキャラを演じたいのなら辞めておきなさい。私には到底適わないわ」

「意外と自己分析出来てるんだな。おみそれした」

「ポテチを手で食べるか、箸で食べるか、その方が余程重要よ」

「それこそどうでもいい問題だ！ちなみに僕は箸で食べるぞ」

「つまらない事を言うわね。何で箸なんだ、くらい言いなさいよ。箸で食べたら手が汚れないのよ、くらいの生活の知恵を言う機会も与えないような甲斐性なしだとは思わなかったわ。これだからロリコンは...」

「おい、ずいぶん長い台詞を言ってるなと思ったら聞き捨てならない単語が含まれてた気がするぞ、何て言ったんだ」

「あなたの初恋っていつ？」

「質問に答えろ！」

「私の質問よりも重要な質問なんてこの教室の外にしか存在しないわ」

「結構たくさんあるんだな...分かったよ。幼稚園の時だ」

「相手は誰？」

「幼稚園の先生だよ」

「じゃあ初めて同い年や年下に恋をしたのはいつかしら」

「小学1年の時だな。同じクラスの子」

「ロリコン」

「罨だ！」

2010.03.20 Sat

【会話ブログ】唄はすっぴんのようにダイレクト

「私達のブログが誤報、というか詐称じゃないかという抗議のハガキが来てるわ」

「心外だな、何て書いてあるんだ」

「世田谷区：ラジオネーム：扇情の御手さん。 お二人は高校生だと思っていましたが、違うんですか？ どうして車内用グッズがそんなに気になるんですか？ それとも大人が高校生のフリをしているんですか？」

「なるほどな。でも高校生が車の話をしちゃいけない、って事も無いだろう」

「隠さないで本当の事を言っちゃいなさいよ。私達は社会に選ばれし存在なのよ。毎日運転手付きの車で送り迎えをされているの。でも目立つから校門までは車で来ないようにしてるだけよ」

「そうだな。お前は山手線という名前の車。僕は埼京線という名前の車。運転手付きだ。わざわざ学校から少し離れた最寄の駅までの送迎に留めている」

「よく出来ました。分かったかしら？ 荒城の神酒さん」

「おい、名前間違いはマズイぞ、誰もハガキを書いてくれなくなる」

「抗議のハガキなんてもう読まないから良いのよ。真っ黒に塗りつぶしてから燃してしまいなさい」

「燃やす前に黒く塗りつぶすあたり、本気度の高さが窺えるな」

「次回から和歌のコーナーになるわ」

「難易度が上がるだけだろ。僕達の出番がこれで最後になりそうだ」

「想い人 想いし人に 届からむ 艶なる花の 泡沫とぞ散り」

「どういう意味だ？」

「想いを寄せても届かない人に、希望を持って想いを寄せるのは、美しい花のように綺麗な想いだ、ただ美しい花もいつか散るように、届かぬ想いもいつか断ち切るのが望ましい。という

歌よ。ありがたいでしょ。万葉集に入ってるわ」

「よくそんなの知ってたな」

「今私が作ったのよ」

「えーっと、一つずつ整理していこうか」

「何が分からないのよ。私が今即興で作ったの。それは本当よ」

「じゃあ万葉集がこの事件の最大の謎という事になるな」

「万葉集がいくつもあって良いじゃないの。既存の概念に捉われるような人は嫌いよ」

「万葉集って他にもあるのか？でも今、即興で作ったって...」

「今後新たに【平成色恋万葉集】が編纂されるかもしれないでしょ。そうなったら採用されないわけじゃない。私の歌を世に埋もれさせるなんて後世への重大な損失だわ」

「まあ歌は悪くなかったと思うが...でも季語が必要なんじゃないのか？」

「短歌の横に詠み人の名前も記載されるじゃない」

「本になるとしたらそうだろうな」

「その私の名前が季語よ。私の名前はオールシーズン、全天候型。どの季節にも常に変わらずあり続ける不変的な物よ」

「屁理屈も ここまでくると 称賛を されてしかるる べきと思わん」

2010.03.20 Sat

【会話ブログ】 TDL（東京という夢の国）に住んでいます

「きゅう、ネタ切れ...」

「おい、大丈夫か」

「きゅきゅきゅ、もうダメ・・・」

「全然普通のキャラと違うじゃないか。一応めげずにハガキを送ってきた人もいるからハガキのコーナーでもやるか」

「どんな愚民の言葉でも受け止めてやるわ。読みなさい」

「突然元に戻ったな」

「あら失礼な。私は常に精神安定剤が裸足で逃げ出すくらい安定してるわ。抗うつ剤に抗う力を持っているのよ」

「さっきの声を録音しておけば良かった。それと抗うつ剤が必要ならなるべく抗わない方が良いと思うが。まあ良い。川越市：ラジオネーム：クリスタルはKじゃなくてCさん。お二人の口調には特徴がありますが、自覚してらっしゃいますか？それとお二人の名前を教えてください」

「区長？品川区の区長は誰だったかしらね。あなたは確か板橋区だったかしら。そんなに特徴的なのに今まで知らなかっただなんて損したわ。あんまりお腹減ってないかなと思って単品で注文して、やっぱり食べられるわと思って追加注文してるうちに、今日のお得割引ランチと同じ内容の品物を正規の値段で注文してしまった気分」

「例えが長いワりに全然最初のケースと当てはまってないじゃないか！しかもその区長じゃなくて、口調だよ。口癖とか、言い回しとか、そういう意味だ」

「あら、私ほど特徴の無い口調も珍しい、こんな私が入前で話すなんておこがましいと自負しているのに」

「殊勝な態度は痛み入るが、お前は相当特徴のある話し方だと思うぞ」

「そうかしら。今まで誰にも言われた事が無いわ。どう特徴があるのか、是非聞きたいわね」

「口癖ならともかく、口調に関しては説明するのが難しいと思うんだが…」

「つまらないわね。ハガキもろとも破り捨ててやろうかしら」

「服をか皮膚をか肉体をか！」

「違うわよ。なぶり尽くしてやろうかしら、って言ったの」

「下手すると僕が喜ぶ可能性があるじゃないか…まあ良い。そういう表情も声質も変化させずに、見事に喜怒哀楽を表現するのがお前の話し方の特徴だ、と僕は思う」

「そう、よく見てるのね。でも少し違うわ」

「自分ではどう思うんだ？」

「私には楽しかない」

「そうなのか？怒ったりしないのか？」

「あなたがあまりにもバカらしくて喜ばしい時も楽しいし、あなたがあまりにもバカらしくて怒ってる時も楽しいし、あなたがあまりにもバカらしくて哀しんでいる時も楽しいわ」

「上手にまとめてあるような気がするけど、でもやっぱり屁理屈なんじゃ…」

「うるさいわね、殺すわよ」

「完全に怒ってるじゃないか！」

「あなたを殺すのはさぞ楽しい作業でしょうね」

「それは後付けの理由だろうが！それはそうと、名前だってさ、どうする？」

「名前なんて個体の概念を表すだけよ。名前抜きで人々に認識されるような存在になりたいものね」

「僕にはフィロソフィーは分からない」

「まあ良いわ。名前くらい。減るものじゃなし」

ミ「じゃあ僕から。僕は夢鼠（ミッキー）」

ミ「私は黒鼠（ミニ一）よ。これからは「」の前に二人の頭文字が入るから分かりやすくなるわ」

ミ「二人ともミだ！」

2010.03.21 Sun

【会話ブログ】 おしえて！おじいさん

「今日は世界アルツハイマーデーなんだよって言い出したいかもなのかも！」

「うおっ、久し振りに出やがったな」

「んー？そんなに久し振りじゃないよ、さては君はアルツハイマーの方ですね。大変残念な診断結果ですが...息子さんは若年性ザルツブルガーの疑いがあります」

「僕は別に若くしてオーストリアに居を構えたりしてないぞ」

「じゃあゲルハルト・ベルガーの方ですか？」

「セナの愛読書は聖書で、僕はプレイボーイなのさ、って言わせるな！ネタが古いんだよ！今日は結局何しに来たんだ」

「んー？忘れちゃったかも。そうなのかも。違うかも。あれが鴨かも分からないかも！」

「大丈夫か、お前。あんまり飛ばすとまた出番が減るぞ。中の人が脳を削る思いでお前の言動を注意深く見つめている」

「ふん、くさったしたいめ。仲間にして欲しそうにこっちを見つめているんじゃない！馬車の中は可愛らしいスライム達で既にいっぱいかも！ホントは息子達だって置き去りにして、全部スライムにしたいくらいかも！」

「今ドラクエ5の話はちょっと古くないか？さっきからお前の年齢がよく分からないぞ」

「ピー。ただいまより自動操縦システムにシステム移行します。直前に10000分の1秒間、再起動のために作動停止します...ねえねえ、今日が世界アルツハイマーデーって知ってた？それって結局どういう意味なんだろうね？分かるの分からないの和香分からないかも！」

「少しだけ自動操縦の方がキャラがマシみたいだな、とりあえず再起動について別にネタがないなら言わなくてよかったと思うぞ。っていうかお前の名前って和香だったの？」

「だったら何さ。何なのさ。そうやってさ、私をさ、いつもいつもさ、ないがしろにしてさ、ミッキーってさ、釣った魚にさ、えさ、えさ...うーん、最後まで上手に”さ”に繋がられそうにないかも」

「それだけのために彼女面されたコッチの迷惑も考えてくれよ」

「嬉しかった？」

「嬉しくない！ミニーに殺される」

「若いおぼこが彼女一筋なんて、泣かせるねっ！」

「おぼこは普通若いだろ、津軽弁で赤ちゃんだからな。男って言いたかったんだろ」

「わすなんのごどがわがんね」

「方言は大好きだが、文字にすると読みづらいから辞めてくれ」

「あなたはわたしのほうげんについてだいさんしゃにつたわりにくいというにんしきをもっているのにんしきしてもかまわないか」

「平仮名だけでも読みづらいし、句読点も使ったほうが良いぞ」

「○×△〒Φ†▽☆\$#」

「そういうのはホントに文字ならではの手法だな」

「電話のシャープはシャープではない、あれは”いげた”という名前の記号」

「突然雑学が！しかも本当っぽい！っていうかキャラはどうしたんだ！」

「今日は結局何の話題だったのか知りたいかも？そうなのかも。違うかも」

「僕は知らないよ。突然アルツハイマーとかなんとか…」

「アルプスは今、嫉妬と妄想でてんやわんやの大騒ぎかも！上かも下かも上を下へかも」

「ど、どういう事だ？ペーターがクララの車椅子を壊したのか？」

「んー？どうして私の名前が分かったのか知りたいかも？そうなのかも。違うかも。ありえない

かも！」

「え？お前の名前ってクララなの？」

「幼女（ハイジ）だよー」

「違うじゃねーか！完全にその名前は初耳だ！」

「ハイジはアルプスは今！だもん。アルツハイマーは嫉妬妄想の研究家なんだよ！」

「全く意味が分からないしオチも無い気がするけど…」

「ちなみに世界アルツハイマーデーは9月21日なんだよ！ちょうど半年ズレてたかも」

「おい、そんな事されたらもう何でもアリになるぞ…」

2010.03.21 Sun

【会話ブログ】 曲名は「ありがとう」

<http://life-cdn.oricon.co.jp/69255/>

思わず口ずさんでしまうアニソン、1位は「タッチ」、2位に「エヴァ」

「さて久し振りの登場ね。今日は何を話すのよ。」

「いや、別に久し振りでもないぞ。しかも昨日は変なヤツが乱入したから相手しておいた」

「あら、私から感謝の言葉を引き出そうとするなんてずいぶん可愛らしいところがあるのね。でも無駄よ。私は誰にも感謝なんてした事無いから」

「別にそういう意図は無いんだが...」

「ありって10回言ってみなさい」

「おい、お前らしくないぞ。オチもバレバレだし、しかもこの展開だと"ありがとう"って言うのは僕じゃないか」

「全く頭が回らないわね。わざと間違えれば良いじゃない」

「あ、そうすればお前が正解を教えてくれるワケか...」

「おバカさんと会話すると疲れるわ。でも特別に今回は正解を教えてあげる。ありがツェーン、よ」

「どうやったらそこまで捻くれる事が出来るんだ！しかも響きが妙に格好良い！」

「当たり前よ、日本語とドイツ語、合わせたら世界中の言語が平伏すわ。唯一良い勝負が出来るのがポリネシア諸語かしら。でも響きが面白いという点においてよ。格好良さのジャンルでは同じ土俵に立つ事も出来ないわ」

「その価値観が全く分からないからスルーさせてもらう」

「何をうぬぼれてるのよ。そう簡単に私の裏側にパスが通せるワケ無いじゃない」

「それは失礼した。お前がそんなに凄腕のディフェンダーだって知らなかったんだ」

「それはそうと、上のニュースは何？」

「何かのネタになると思って貼り付けてくれたんじゃないのか？」

「ありきたり過ぎるわ。それとも私の好きなアニソンを言ったら良いのかしら」

「そうだな、中には興味のある人もいるのかもしれないぞ」

「タッチよ」

「ありきたり過ぎる！」

「青春って曲名だったかしら」

「え？タッチはタッチだろ」

「音も立てず～過ぎてく青春～には～」

「お前が歌うとは思わなかった...っていうかそんな歌知らないぞ」

「あらそう、でもタッチだと思うけれど。それとも私の記憶が間違ってるだけでも言いたいのかしら」

「いや、僕はお前を信じるよ、主題歌も一つじゃないだろうしな」

「ふーん、じゃあ特別にもう一つ好きなアニソンを教えてあげるわ」

「今日は特別が多いな、どういう風の吹き回しだ」

「キャプテンのエンディングテーマよ」

「お前実はイメージに反して野球アニメが好きだったのか？オープニングなら聴いた事がある気がするが...エンディングとはまた渋いな」

「曲名は自分で調べなさい。じゃあまたね。今日はもう帰るわ」

「あ、おい！...答えを訊いたり言ったりしないで帰るとは珍しいな...結局曲名は何だったんだ...」

2010.03.22 Mon

「ああ、痛い。どうしてこんなに痛いのかしら」

「どうした、どこか痛いのか？」

「痛いから痛いと言ってるに決まってるじゃないの。そんな事も分からないなんて頭が痛くなるわ。ああ、こうなる事を先読みして頭が痛くなっていたのかもしれないわね。未来の病気を先に体験するなんて、便利なようで不便だわ。不治の病だったらどうしてくれるのよ。まさに命がけで身も細る思いだわ」

「完全に八つ当たりっぽいけど...大丈夫か？頭が痛いのか」

「日常レベルで言えば大丈夫じゃないわ。不治の病レベルで言えば大丈夫かもしれないけれど、頭の痛い人間にはそんな事はどうでも良いのよ。大丈夫じゃないと言っておく事で皆に優しくされるなら、私はあえて大丈夫だと言ってやるわ。でもそれすらも頭の痛い人間にはどうでも良いわ。ああ、何よ、頭が痛いのに一人でベラベラと、まるで頭の痛い子みたいじゃないの」

「あんまりしゃべらない方が良いと思うぞ。どんな痛みなんだ？ガンガンとかズキズキとか」

「ゴーンとぶつかって以降、イタタタ、と痛むわ」

「え、頭をぶつけたのか？」

「そうよ。暗闇に溶け込んでしまう事が出来るのかどうか試そうと思って、目を瞑って闇夜を歩いていたら突然何かにぶつかったのよ」

「そういうのは自業自得って言うんじゃないのか」

「そうかもしれないわね。ホントは2割と言いたいけれど、3割自己負担で良いわ。だから7割は私にぶつかった何かが悪いわね。あら、何よ。失礼な」

「人のツッコミを先読みするな！」

「うるさいわね。ぶつかるわよ」

「そんな事してたらもっと頭が痛くなるぞ」

「違うわよ。不躰るわよ、って言ったの」

「変な動詞を作るな！」

「おばんかも！不躰少女見参かも！今日は娘さんがご結婚という事でご愁傷様でした！お悔み申し上げますんだよ！」

「うおっ、いきなりだな」

「話が終わりそうなこんなタイミングで出てきたという事は、私がオチを担当しなきゃならない可能性が高いかも？こりゃぁ緊張なんだよ。でも頭が痛いから良いオチが浮かばないんだよ。そうなのかも。違うかも」

「何だよお前も頭が痛いのか。まさかぶつけたんじゃないだろうな」

「んー？暗闇になるのが嫌だから、自分から暗闇を作った方がまだましかも！と思って目を瞑って歩いていたんだよ。そうしたらゴーンとぶつかってイタタタなんだよ」

「そう、目を瞑って闇夜を歩くのはやっぱり危険ね。きっと世界中で毎日起こっている事故よ」

「いや、世界中で2人しかいないと思うぞ」

2010.03.23 Tue

【会話ブログ】君に届けたい憎悪

「全く中途半端ね」

「何がだ？僕の顔か知能かツッコミか」

「そんな事はもう今更言わないわよ。ようやく自覚してくれて褒めてあげたいくらいよ」

「適当に言っただけなのに全部当てはまっていたのか！」

「中途半端じゃないところを探してあげたいけれど...一つも思い付かないわ」

「どこか一つくらい僕らしさを表す特徴があっても良いんじゃないのか？」

「世の中には”無”って物があるのよ。無理やり無粋な無理難題を突きつけるなんて無謀だし無遠慮だし無茶だわ。そんなあなたが無一文の無機質無気力無問題野郎になったとしても、私は無表情のままだし、感想も皆無よ」

「中途半端どころか、無になっちゃってるじゃないか」

「そうよ。中途半端は社交辞令だったのよ。気を使った事に感謝して欲しいわ」

「それはすまなかった。頼むから僕をこの世に存在させてくれ。それはそうと何が中途半端だと言いたかったんだ？」

「今の時間がよ。もうスグ明日という時間に会話だなんて」

「まあ別に良いんじゃないか？まだ明日まで30分もあるじゃないか」

「そうね。30分あれば充分よ。どんな人間かすぐに分かるわ」

「僕はいまだにお前の事が全然分からないんだが...」

「あら、私は竹を割った部分から大量に血飛沫を撒き散らしているような性格よ」

「それだとサッパリしてるのかドロドロしてるのか全く分からないぞ」

「真のツンデレとは私の事よ」

「ツンデレってもっと分かりやすく、ツンの時はもっと怒ってるようなイメージがあるんだけど...」

「よく分かったわね。私はツンデレじゃないわ。だってデレの部分がないもの」

「それじゃ僕に対してツンツンしてるだけの存在じゃないか」

「そうね、強いて言えばツンドロね」

「ツンツンしててドロドロしてるのか？よく分からないけど最悪っばいな」

「そうかしら。ドロドロの愛憎劇なんて滅多に体験出来ないわよ。人の感情で最も長続きするのは憎悪と言っても過言ではないわ。殺したいくらいに愛されたらきっとその愛は永遠なのよ」

「も、もしかして僕の事をそこまで想ってくれてるのか...？」

「言わなきゃ分からないような人はトイレに肺をぶちまけるわよ」

「せめて吐血くらいのレベルで止めてくれ！」

「違うわよ。永久の愛を誓うわよ、って言ったの」

「お、お前な、突然そういう事言われると照れる暇もないくらい驚くだろうが」

「違うわよ。賭場の鍵は丁半よ、って言ったの」

「まさかの3段活用！それが最終形態で良いのか？」

「違うわよ。カバとカバで象さんよ、って言ったの」

「お前とは伝言ゲームだけは絶対にやりたくないな...」

【会話ブログ】 まるかいてミニー

「あなたって正にヘタッポンってイメージよね」

「それはヘタレニッポンって言いたいのか」

「違うわよ。下手な鉄砲数うち当たるを地で行くような八方美人タイプの人の心を結局踏みこむタイプのどうしようもない人って事よん」

「最後の”ン”のクオリティが低過ぎてツッコむ気にもならないな」

「私は正に地球ってイメージよね」

「自分で言うか？全てを統べる者とでも言いたいのか？それとも多様性を訴えたいのか？でもお前ほど多様性を排除した性格も無いと思うぞ」

「あら失礼な。私は何にでもなれるわよ。ツンデレ以外にもクーデレにもなれるわ。他に何が必要だと言うのかしら」

「中には好きな人に素直に気持ちを伝えられる人だっているし、現実の世界ではツンデレやクーデレなんて少数派だろう！それしかないと思ってるところがお前の排他性だと言ってるんだ！」

「あら、ちょっと勉強でもしてきたのかしら。でもまだ甘いわね。ツンにはカツーンやマツツンやバツツンが含まれるし、クーにはクールとかクーラーとかクールランニングとかが含まれているのよ。多様過ぎて困ってしまうわ」

「ツンの単語の意味が1つも分からないぞ。そしてクーの単語の意味は全部ほとんど同じだぞ」

「うるさいわね。入り江で溺死させるわよ」

「苦しいのは嫌だ！せめてひと思いに！」

「違うわよ。Ich liebe dich.って言ったの」

「ドイツ語で【愛してる】じゃないか...ストレート過ぎて返答に困るぞ...その言葉を信じてもいいのか？」

「信じなさい。今日はまず光があると思しましょう。するとそうなるのよ」

「創世記だな。分かった。今回は大人しく従ってみる事にする」

「素直なのね。白旗よ。あなたがイギリス軍だとは思わなかったわ」

「やっと話が元に戻ったな。今日はヘ○リアの話じゃなかったのか」

「いいえ」

「違うのか？じゃあヘタ○ア以外の話をするか？」

「いいえ」

「おい、どっちなんだ。僕と話すのが嫌なだけって言いたいのか」

「いいえ」

「なるほどな。ヘタリ○の日本になりきってるわけか。じゃあ...僕の事が嫌いか？」

「ええ」

「いいえ以外も言えるじゃないか！」

2010.03.24 Wed

【会話ブログ】 ブログもダイエット

「やっぱり上にニュースのリンクが無いとスッキリしてるわね。これだけダイエットが流行してる今こそ、ブログもダイエットさせるべきだと思うわ」

「ただ単にお前がニュースに興味を示さないからこういう事になるんだ」

「あらそう、私に非があるとでも言いたいのかしら」

「少なくとも僕には非は無いはずだぞ」

「そんなに簡単に責任を押し付けて良いのかしらね。あなた、自分の役割について認識してないんじゃないかしら。自分の責任を見失っているという事はよくあるのよ」

「どういう事だ？」

「あなたはマスターオブセレモニーであり、チェアマンであり、アナウンサーなのよ。だからシテ○グループとか、ジャパンエ○ラインとか、サブプライムローンとか、リーマ○ブラザーズとか、ゼネラル○ーターズまでしっかり上手に扱わないといけないの」

「僕が世界恐慌の引き金だったのか...きっと数十億人から命を狙われてるんだろうな...」

「そうよ、コンプライアンスをもっと意識しないとコンディションがコンデンサーでコンデンスミルクにされるわよ」

「お前が英語が苦手な事だけがよく分かった」

「うるさいわね。蹴り殺すわよ」

「お前いつの間に拳法を身に付けたんだ！」

「違うわよ。蹴り殺すわよ、って言ったの」

「一文字も違わないだろ！」

「死にたくなければ私を手玉にとってみなさい」

「それはまた至難の業だな」

「そうかしら。1000円でホイホイついていくような女よ」

「そうだったのか？心配で夜も眠れなくなりそうだ」

「ついて行って、周りに人気が無くなったら金品を全部強奪するの」

「お前みたいなヤツを野放しにしておくのは僕の良心が許さない」

「あら、儂げで深窓の令嬢みたいな私を道中色んな妄想で陵辱した楽しさを思うと、全財産を失っても文句が言えないくらいだと思うけど」

「深窓というよりは、出窓のみたいな自己顕示欲に通じるところがある気がするぞ。そもそも妄想にお金を払ってたら皆破産しちゃうじゃないか」

「あらそう。僕も妄想してます、って自ら認めたようなものね。私を使ってどんな妄想をしているのかしら。言わないと...」

「べっ、別に...どこか一緒に行きたいな、とかそんな程度の事だよ...」

「いやらしい妄想もしているんでしょう？白状した方が良いわよ」

「いやらしい妄想はしてない！」

「まあ。いやらしい妄想はしてないって言うの？暴走機関車に跳ね飛ばさせてやろうかしら」

「何故妄想してない方が悲惨な状況になるんだ！」

「違うわよ。妄想されなきゃ恥ずかしい、って言ったの」

「だっ、だからそういう事だろう？妄想されなきゃ嫌だなんて、天賦の変態性をカミングアウトされても対処に困るぞ」

「あなたなんて私の頭の中では常に真っ裸よ。仕方ないわよね。まだ知恵の実を食べてないし。いつかは原罪を知る日が来るのかしらね」

「今は僕の頭が空っぽだと言いたいのか？」

「違うわよ。食べられなくなければ最初から作らなければ良いって言ってるの。知恵の実を作っておいて、食べたら怒るなんて責任を押し付けてるわ」

「おお、そこに話が繋がるわけか。今日は冴えてるじゃないか」

「普通よ。でもどこか連れてって」

「そうか、今回はどこか別の場所からっていうのも面白いかもしれないな」

「エデンの東へ行きたいわ」

「僕達は人類で初めて殺人を犯した人間だったのかー」

2010.03.25 Thu

【会話ブログ】 クールランニング

「疲れた疲れたかも！体育の授業にランニングなんて頭がおかしいんだよ！体育の授業といえ
ばプール開きの前の掃除って相場が決まってるかも！」

「うおっ、出た」

「何が出ますか何が出ましたか何も出ていないんだよ？汗ならちょっとだけ出たかも。今は吐息
が出ちゃって愚痴が出ちゃって、でも溜息は許さないかも！そうなのかも。違うかも」

「まさか先回りしたのか？でも僕は盛大な溜息を吐いてやるぞ」

「ダメかもダメかもモルボルかも！防ぐ術が無いかもー！」

「あのな、人の溜息をくさい息扱いしやがって。僕の息はホワイトウィンドだ」

「わぁー、ホントだよー。すっかり元気だよー。ありがたやありがたや」

「お前と話すとは変わらないう変な展開になるな。話が戻るけど、今は体育でランニングなんてやっ
てるのか？」

「んー？今日の体育は跳び箱だよー」

「おい、あれだけ喚き散らしてランニングじゃないってどういう事だ！」

「だって私全然跳び箱飛べないんだよ。グスッ。だから助走してるだけかも。結果的にランニン
グだって言ってるんだよ！死ね！」

「せっかく良いカンジのキャラだと思ったのに、最後で台無しだ」

「こちらのシステムキッチンはイタリア製になっております。日本人の体型にはちょっと大型か
もしれませんが、奥様は背が高いからちょうど良いと思いますよ」

「どうしたんだ突然、全然意味が分からないぞ」

「え？ダイニングキッチンの購入を希望されたじゃないですか」

「遠過ぎだよ！ランニングの話だっただろうが」

「だ、ダメですよ！こちらの登山道は飲食禁止となっております。ピクニックでしたら他の場所をお願いします！」

「今度はハイキングって言いたいのか」

「食べただけでピクニックだなんて細か過ぎかも！同じ道を歩いても、食べたらピクニックで食べなかったらハイキングなんてインチキかも。巨人ヤクルト戦と、ジャイアンツスワローズ戦と、東京東京戦は同じ意味かも。そうなのかも。違うかも？」

「例えが全然分からない。それっぽく聞こえるけど違うような気がする」

「もっと掘り下げて！怖がらないで！あなたを見つめて！きっと、きっとあなたなら出来るよ！私信じてる。あの日、夕焼けの河川敷で誓ってくれたじゃない！」

「人違いだ、他を当たってくれ」

「私を捨てるとは大胆ね。切り刻んでやろうかしら」

「おい、ミニーのマネをするな」

「おら、自分が誰なんが、わがんねー」

「また方言かよ、ひょっとしてお前の出身は東京じゃないのか？」

「父親生まれ母親育ち家ん中のヤツは大体友達」

「ちょっと表現が生々しいから自重してくれ。それと友達じゃなくて家族だろ」

「家族って何かね？心にダムはあるのかい？子供がまだ食べてるでしょうが！」

「ネタは一つずつ頼むぞ。いちいちツッコむのも大変なんだ」

「お疲れかも？人間関係に悩む現代っ子を演じてても、同情なんて買えっこないかも！」

「僕が人間関係に悩んでるとしたら、それはお前が原因だ！」

2010.03.26 Fri

【会話ブログ】三位一体三本の矢

「昨日は人間関係について話していたようね」

「そうかもそうかも。そうなのかも。違うかも。わーい！ついにミニーさんと話せたかも？可もなく不可もなくかも？カモンエブリバディ！」

「川面からもう、鍵も殻も菓子も蟹も見つかったからもう良いわ」

「ガラモン？」

「いえ、何でも無いわ。口が滑り過ぎて顔から出て行ってしまいそうになっただけよ」

「……………」

「ちょっとあなた、何か言いなさい。普段は減らず口で腹減らしだと聞いているわ。会話をしましょう。それとも私は会話をするような柄のモンではない、と言っていたんじゃないでしょうね」

「わーん、怖いよー、お姉ちゃんがいじめるよー！どう考えても同い年だけど超えられない壁が出来上がっているんだよ！超えたら晴れて同い年になれるかも？むっ？じゃあ超えても超えなくても同じかも。そうなのかも？違うかも」

「……ちょっと、聞こえる場所にいる事はお見通しなのよ。早く出てきなさい」

「うっ、鋭い。でもミニーも困る事があるんだな。苦手が知れたのは後学のために有意義な時間だったぞ」

「まあ、私には苦手なんて一つも無いわよ。そんな事より意地悪をして陰から覗き見なんて良い度胸をしてるわね。マジシメるわよ」

「むむっ！口調が変わったんだよ！若者による若者言葉は若者が若者らしさを発揮する意思表示なのかも。という事は大変な事態が発生するんだよ！」

「違うわよ。抱き締めるわよ、って言ったの。あなたはうるさいから取り押さえる必要があるわ」

「……………」

「あら、あなた、優しくされる事に慣れてないのかしら？」

「ダメよ、そんなの、どうしてそんなに焦らすの？早くして！どうにでもして良いのよ！」

「いやらしくされる事には慣れてるのかしら」

「そ、そんな、裏切ったつもりは無いんです。でもどうしてもこのお金が必要で……皆で貯めた大切なお金だって分かってます！でも、でも……」

「やましい事をするのも慣れてるのかしら」

「今日は大切な用があって来たんだよー！！ミニーさんにも言って欲しかったかも！私一人じゃ似顔絵が重いかもー！！んー？全然似てないんだよ！」

「やかましい事この上ないわ。で、あなたは一体何がしたいのか言ってごらんなさい」

「今までほとんど絡めなかったから、今日はミニーさんと話をしにきたかも。だからもう達成しちゃったかも？」

「あらそう。それで、感想はどうだったのかしら」

「とっても楽しかったんだよ！だから毎日付きまとして気を失うまで話し続けるかも？そうなのかも。違うかも」

「……………」

「あら、あなた、ひょっとして優しくされる事に慣れていないかも？」

「うるさいわね。ピー（自主規制）するわよ」

「お、おい、お前らそろそろ落ち着いてくれ。日記で音声をいじるなんて荒業を使うなよ」

「とっても恐ろしいんだよ！ガクガクブルブルなんだよ！ピー」

「ああっ、気絶しちゃったじゃないか。しかもピーは気絶する時に発する声だったとは……って
うか初めてまともに会話するのに妙に息が合っていたような……」

「そうかしら。そんな気はしなかったけれど。私に並び立つ存在がいるはずがないじゃないの、失礼な。魔が差すわよ」

「ついカッとなって、みたいな若者的な行動をするつもりじゃないだろうな！」

「違うわよ。また話すわよ、って言ったの。仕方ないからまた会話してあげても良いわ」

「.....確かに。二人がどうなるのかちょっと気になる.....」

2010.03.27 Sat

【会話ブログ】正しい名前

「ようやく一区切りね」

「どうした？一仕事終わったみたいな顔して」

「正に一仕事終わったのよ。ようやく一区切りだわ」

「何の事を言ってるんだ？そういえば今日で僕達がここへ来てから10日になるな。その事を言ってるのか？」

「当たらずも遠からずといったところかしら。今日で終わりにすれば、もうあなたと関わりを持つのが最後になって、ようやく解放されるわ。って言いたかったの」

「おい！僕達はそんな仕事上だけの付き合いだったのか！人気お笑いコンビも真っ青な淡白さだな！」

「相手によっては、あまり近づきすぎない方がお互いのクオリティを維持出来るという事があるのよ。あなたはそれ以下の、関係を解消したい程度のクオリティね」

「それを言われたらもう反論出来ない」

「あら、感情に訴えてみても良いわよ」

「好きだ。今後も付き合いを継続して欲しい」

「嫌よ。と言ったら？」

「引き下がるしかないが...」

「つまらないわね。だからクオリティが低いって言ってるのよ。一生ストーカーになってやるぞ、くらいの事を言ってみなさい。そうしたら私は喜んで.....警察に突き出してやるわ」

「どっちみち振られるか逮捕されるかの二択じゃないか！」

「違うわよ。検察に突き出してやるわ、って言ったの」

「逮捕どころか裁判が始まっている！」

「仕方ないからもうちょっと付き合っても良いわよ。引く手数多で順番待ちの行列を引き連れて歩く毎日なのだけれどね」

「そ、そんなに言い寄って来るヤツが多かったのか...それは...」

「言ったら殺すわよ」

「うっ、失礼な事を言いそうになっていたのがバレた」

「違うわよ。タコライスがあるならイダコライスもあるのかしら、って言ったの」

「台詞の長さが全然違う気がするが...タコライスのタコはタコスの意味じゃないのか？だからイダコはちょっと意味が変わってくると思うぞ」

「どうしてよ。タコライスのライスのご飯の意味でしょう。じゃあ飯タコ飯で、ライス大盛りのタコライスじゃないの」

「お前スゴいな、今すぐその名前の権利を取得した方が良いぞ。商標登録って言うんだっけ？」

「そんなものに興味は無いわ。私が興味があるのはあなたの事だけ。それとも順番待ちの連中に私を奪われても構わないのかしら」

「そ、それは困る...が...順番待ちってみんなうちの学校の生徒か？」

「違うわ。ソ連A型とか、ジステンパーとか、ロタウィルスとか、SARSとか、そういう魑魅魍魎が私の肉体や細胞を奪うべく順番待ちしているわ。今はまだあなたのものよ」

「僕は人類に嫌われるウィルスと同格の存在か...」

2010.03.28 Sun

【会話ブログ】大人？子供？高校一年生

「そう言えば半年くらい前に、お婆ちゃんが10歳の孫を出品したニュースがあったわね。あなた、先日ロリコンを公表したんだから早く入札した方が良いんじゃないかしら。それとももうオークションは終了してしまったかしら？」

「逆だよ逆！10歳の少女がお婆ちゃんを出品したんだ！」

「あらそう、残念だったわね。でもロリコンについては否定しないのね」

「お前相手に否定しても無駄だからな。会話の中にどんな罠を仕掛けられるか分かったもんじゃない。だからあえて無視させてもらった」

「あら、そうして日々成長しているのね。ズルイわ。自分だけ成長して、成長していない少女を好むだなんて」

「現代の姥捨て山みたいだな。下手すりゃ身寄りの無いお年寄りが自分を出品するような世の中になるのかもしれないぞ」

「ロシアの作家ナボコフは、英語でロリータを書き上げたそうよ。9歳から14歳の、未発達の少女の肉体を性的に【ニンフェット】と称したり、言葉のセンスに光るものがあるわね」

「お年寄りだけでなく、若い女性が自分を出品したり、力のある若い働き手が自分を出品したり、なんて事も…」

「少年時代に死別した恋人の少女が忘れられず、結婚した女性の連れ子のドロレスに恋をするわけね。独占欲と嫉妬は父性愛にも似ているのかもしれないけどそうではない。あくまで恋人であろうとする欲望はやはり過去のトラウマによるところが大きいわね。でも弱くて守られるべき少女を偏愛するロリコンと違って、ドロレスは恋人と家を飛び出したり、固い意志を持って彼を拒否する強さを持っているわ。その辺りに注目しないと、ただのロリコン向けの作品に成り果ててしまうわ」

「負けたよ。いつまでロリコンの話をしてるんだ」

「あら、最初からずっとよ。他の話なんて何もしてないじゃない」

「僕はずっと高齢化社会とネット社会に警鐘を鳴らすべく話をしていたんだ！」

「知らないわよ。そもそも微笑ましいニュースみたいに扱われていたのが理解出来ないもの」

「まあ、逆だったら大騒ぎで、少なくともお婆ちゃんは逮捕されていたかもな」

「人の人生や命なんて無闇に売ってはいけないわ」

「そう思ってるなら一安心だ。売り飛ばしてやろうかしら、とか一度は言われると思っていたからな」

「あら、私は人の命について話してるのよ」

「どういう意味だ？」

「分からないの？売り飛ばしてやろうかしら」

「僕は人じゃないって言いたいのか！」

「違うわよ。蹴り飛ばしてやろうかしら、って言ったの。ロリコンにはそれくらいしても良いのよ」

「ロリコンじゃないって言ってるだろ！」

2010.03.29 Mon

「久しぶりの登場ね」

「いや、昨日も話したじゃないか。1日しか経ってないぞ」

「私が久しぶりと感じた時間が久しぶりの基準値よ。あなたのような精神異常者の基準を言われても困るわ」

「僕の精神状態がすこぶる良好な事を考慮しても、やっぱり久しぶりとは思えないな」

「この間、あんな事やこんな事があったなー。楽しかったなー。あー楽しかった。そう言えば最近全然日記書いてないな。こんなに色々な事があったんだから日記に書かなきゃ。どう？これでも久しぶりじゃないって言い切れるのかしら」

「お前がそこまで充実した1日を過ごしていたとは思わなかったんだよ。一体何があったんだ？」

「メニューは108種類あるわ。番号を言って」

「そんなにエピソードがあるのかよ？じゃあ、60番」

「今日は話す気分じゃないわ。他の番号にして」

「じゃあ、100番」

「そのエピソードは今日は留守にしているわ。次」

「あのな。何番と何番が今日は話せる状態なのか先に教えてくれないか」

「仕方ないわね。1番から5番までだったら間違いなく本日出勤しているわ。店長のオススメで良いのかしら？」

「ちょっといかがわしい店に入ってしまったような違和感があるぞ。って言うか少ないな...じゃあ1番で良いや」

「一昨日の朝、歯磨き粉をちょっと多めに出してしまって口の中が辛い辛い。大笑いよね。次」

「.....2番...」

「今朝、あなたの顔ってつくづく間抜け面だな、と思ったわ。次」

「お前が久し振りだと思ったのって、実はあまりに暇だったからじゃないのか？」

「失礼な。私に暇な時間なんて一秒たりとも存在しないわ。それより次の番号を言いなさいよ」

「じゃあ5番」

「道を歩いていたら財布が落ちていたの。拾って中をあらためようと思ったら、一万円札が束のように入っていたわ。100枚は入っていたんじゃないかしら。さらに一枚のメモ用紙。そこには【気付かれた。逃亡せよ】って書いてあって、メモには血みtainな赤い染みがついていたわ。私が交番に届けようかどうしようか迷っている所に...ごめんなさい。続きは6番。今日は留守よ」

「何でだよ！気になって眠れないじゃないか！しかも他の番号とのクオリティに差があり過ぎる！」

「うるさいわね。拉致するわよ」

「お前もそのおかしな組織の一員か！」

「違うわよ。旅するわよ、って言ったの。今から5番と6番を体験しに行きましょう」

「いや、あまり巻き込まれたくない...って、もう体験済みなんだろう？」

「まだよ。私は別に過去の出来事だなんて一言も言ってないわよ。未来が混じってても良いじゃないの」

「そんなレアな体験が簡単に出来るわけ無いだろ...」

2010.03.30 Tue

【会話ブログ】 歯無しの嘸は無し

「ルルル、ルールル、ルルルルルー」

「今日はずいぶん機嫌が良さそうだな」

「んー？ やっと来たかも。別に機嫌なんて良くないかも！ だから今日は出向かずに来てもらったかも。 そうなのかも。 違うかも」

「そうか？ お前の歌が聞こえたから気になって来たんだけどな。 機嫌良さそうだったぞ？」

「んー？ 歌なんて歌ってないかも。 私はミッキーを呼ぼうと思って、 テレビで観たマネをただけなんだよ！ するとホントに来たかも。 出来たかも。 キタキツネかも」

「何か色々とツッコミどころがあるから1つずつ整理していこうか」

「そんなの嫌かも！ 刺身とツッコミは鮮度が命なんだよ！ って事は、 上手にツッコミをすると美味しいのかも？ やるね、 大将！ このわさびが効いてるのがたまらないね。 まるでわさびがメインで、 マグロが付け合わせみたいだよ。 お、 そんなわけないでしょ、 って、 声を張らないタイプのベタなツッコミだね？ お、 ベタベタ醤油を付けてるのはお客さんでしょ、 って、 話を膨らませるのが上手くなったじゃないか。 お、 膨らんでいるのは僕の頬ですよ、 って、 じゃあ私は期待に胸を膨らませてDカッ...」

「変な持論を元に変な展開をされてもどうにもならないぞ。 そういう事ははっきり言ってるからお前は登場回数が...いや、 何でもない。 まずは僕がキタキツネじゃない事をお前に言いたいんだ」

「んー？ ミッキーはキタキツネじゃないかも。 そうなのかも。 違うかも」

「違うかもじゃない！ って、 分かってるなら良いや。 後は、 最初のルルルは別に節をつけなくても良いんだぞ。 夏の思い出みたいになってたし」

「ルルルルルルルルルルルルルー、 ルールルルルルルルルルルルルルー、 ルルルルルルー、 ルー！ ルルルルルルー、 ルー！」

「さっきと全然違う！ それはケツメ〇シの夏の思い出だろ！ しかも何故かラップ部分！ 僕が言っているのは、 【遙かな尾瀬～】って文字じゃ分かりづらいんだから辞めてくれよ」

「やっぱりキタキツネ並みにルに反応してるかも」

「キタキツネはツッコミなんてしないだろうけどな。で、結局僕を呼んで何を話したかったんだ？」

「今日、3月31日はオーケストラの日なんだよ！だからジャムセッションをしようと思ったかも」

「いや、オーケストラって管弦楽団の事だろ。ジャムセッションだって楽器の即興演奏の事じゃないのか？そもそも僕は楽器だって出来ないし」

「私達の掛け合いがまさに即興での演奏かも。私はドレミを連続させて話し続けてるんだよ！そしてミッキーはドミソの和音を常に発し続けてるかも」

「そんな特殊技能を身に付けた覚えは無いぞ！用が無いならもう帰るぞ」

「離婚調停中の弁護士と掛けまして…」

「お、今年流行りそうな謎掛けじゃないか。よし、最後だから綺麗に決めてくれよ」

「別れさせ屋と解きます」

「何か似てる気がするが…その心は？」

「離すのが上手い。かも」

「特に何も掛かってないじゃないか…」

「わー、間違えたかも！2つ目は【私達】にしたかったかも！それで【話す（離す）のが上手い】だったんだよ！」

「この話し下手の段取り下手め！台無しだろうが！」

「じゃあ歯医者さん。【歯、成すのが上手い】かも」

「ちょっと言葉遣いに無理があるな」

「じゃあ象さん【鼻吸うのが上手い】かも？」

「上手い事が言えるまで何度もチャンスがあるってルールじゃないぞ。次で最後にしてくれ」

「ハァ、無し。なんだよ...」

2010.03.31 Wed

【会話ブログ】 2010年3月号

<http://p.booklog.jp/book/53206>

著者：公認会話士

著者プロフィール：<http://profile.ameba.jp/mickey-minnie-heidi/>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53206>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ